深く暗い森の奥
糸で覆われた不気味な空間
そこに四肢の自由を奪われ少年がいた

彼の名はユミル
エルフ族の見習いハンターである

そして
ユミルが鋭く睨みつける先には
禍々しい生物が一匹…


今エルフ族に厄災をもたらしている
『害蟲』である
その禍々しい生物を目の前にしても
ユミルは怯むことはない
幼くも鋭い眼差しで
害虫を睨みつけた
その姿は害蟲ハンターを志すに
相応しいものだろう


ただ一つ…
こんな恥ずかしい格好を除いては…
「うぅ…何だこの糸…
身動きが取れない…」
ユミルの衣服は害蟲の糸に絡め取られ
恥ずかしい部分が露出してしまっている
ギチ
ギチ


そこに蜘蛛型の体から伸びた触手がユミルを襲う
『食べられる…！』
そう思ったユミルであったが…
この蜘蛛型の害蟲の目的は別にあった
ズルッ
「や…やめろっ
変なとこ…触るなっ！」
「くそっ…
エレーナさんなら
こんな糸簡単に抜け出せるのに…！」
ニュル
ニュル


エレーナとはユミルの師匠にして
凄腕の害蟲ハーンターである
その優しくも凛とした姿は
誰もが憧れる存在であり
エルフの里では
『金色の弓聖エレーナ』と
謳われている
ユミルは仕事でこの森に入ったきり
行方不明となった彼女を追ってきたのだ


（あのエレーナさんに限って失敗なんてしないはず…）
（でも…
もし何かあったのだとしたら
僕が助けなきゃ…）
（エレーナさんに
格好いいとこ見せるんだ…！）
襲い来る害蟲の恐怖の中
彼は再び決意を固めた…
その時
ピク
ピク
ニュル
ニュル


ユミルの乳首と睾丸を
不気味な触手が包み込んだ
「はひっ!?」
ヤポ
ヤポ
ズ
ニ
ポッ


情けない声と共に
包皮を被ったユミルの陰茎から
ジョロッっと黄金の液体が排出される
失禁である
…うぅ
先ほどまでの決意はなんだったのか…
悔しさと恥ずかしさに
ユミルは涙を滲ませた
しょわぁぁ…


尿の勢いで陰茎をプルンプルンと振り回す姿は
あまりに惨めであり
恐怖のあまり縮こまった矮小な陰茎では
その運動に抗う術はない
かぁぁぁ…
それはユミルの自尊心を
ひどく傷つけた
だがそこに
追い打ちをかけるように…
ブルン
ブルン

睾丸の触手が蠢き始めた

「おふっ…!? 何…これ…? 僕の…金玉に…何してるの…?」

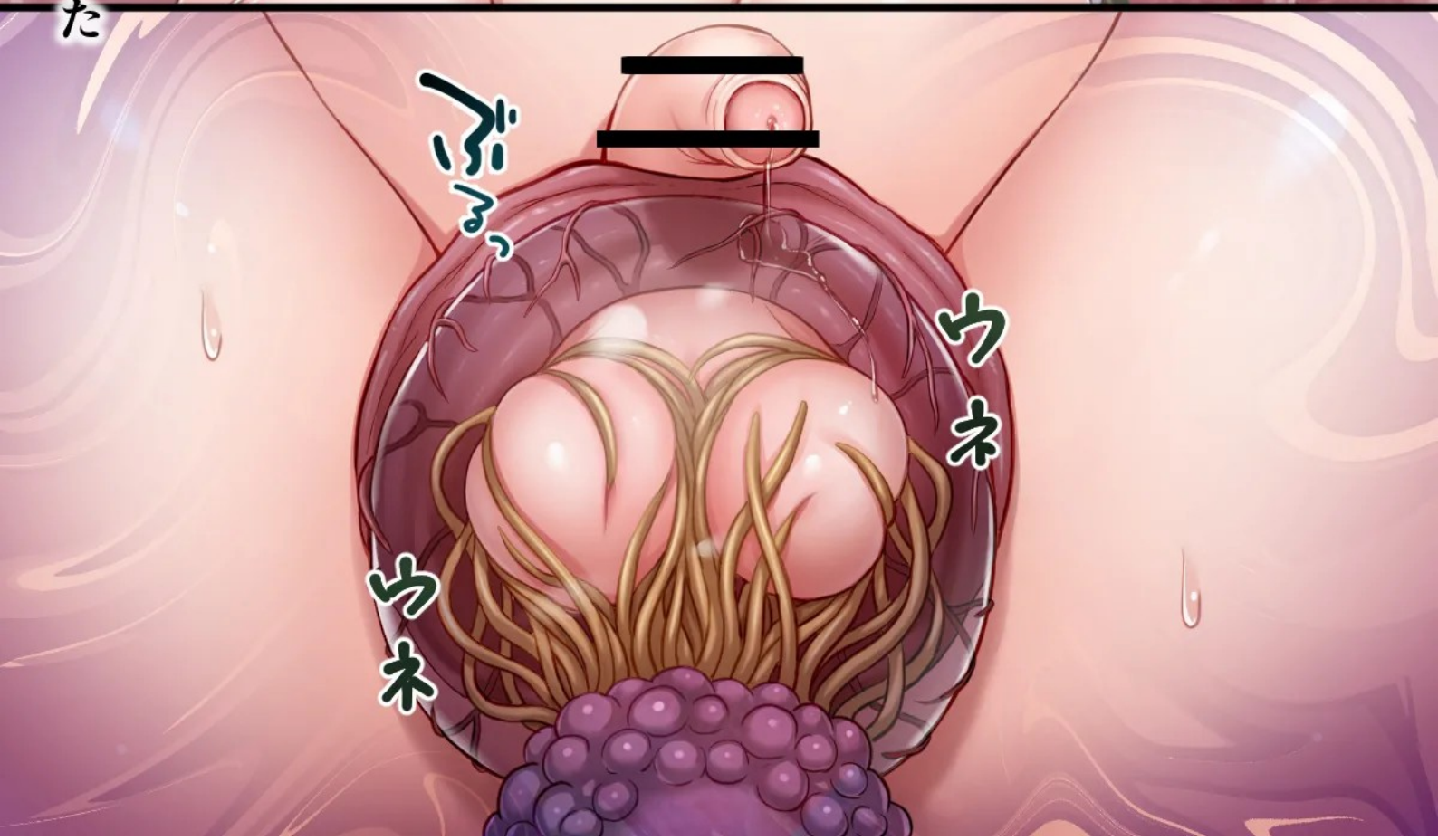
ゴクリ…

害蟲に問いただすも当然返答はない

だが彼は感覚で理解していた

『金玉が食べられる』

事実 触手はユミルの睾丸を捕食しようとしていた




乳首を包み込んだ触手からは
得体の知れない液体が分泌され
徐々に乳首が膨張を始める
はぁ
はぁ
「や…やめて…
僕の体…どうするつもり…？」
そう
この害蟲の目的は
人間のメス化及び繁殖である
ゴポ…
ズズっ
ウネ
ウネ
ズズっ


程なくして下腹部の触手がユミルの分厚い包皮に覆われた陰茎を弄り始める
「い…いや…ちんちんの皮は無理に剥いちゃだめって…エレーナさん言ってたのに…」
もちろんそれはユミルに快感を与えるためではないメス化の妨げとなる精子を無機質に絞り出すだけの作業である
ずぷっ
ニュルルル…


外気にすら一度も触れたことのない
敏感な亀頭を乱暴に摩耗され
次第にユミルの包皮からは
恥垢とともにカウパーが溢れ始めた
ズク
ズク
「オチンチンからなんか出てる…？
オシッコじゃない…何これ…？」
生殖機能を失うことを
感知したユミルの脳が
精子の製造を加速させているのだ
ぅ…ー…
ぞくっ
ウネ
ウネ
ぞくっ


「ひっ…ひぎっ…！」
液体によって肥大化し始めた乳首には
注射状の触手が刺さり
メス化を促進する液体が人体の内部に広がっていく
「はぁ…っはあ…っ！
む…胸が熱い…！」
まっ平らだったユミルの胸板は
もう男性とは言えないほど丸みを帯び
乳首もビンビンに勃起していた
ズプッ
ズッ
ぐぐっ
ぐぐっ


さらに…睾丸の咀嚼はさらに強くなり
金玉が悲鳴を上げる
「やぁっ！……もうやめてっ！
僕の金玉壊モグモグしないでっ！」
あ、
あ、
害蟲の液体により痛みは緩和されているとはいえ
睾丸が歪んでいく感覚は
身の毛もよだつ恐怖をユミルに与えていた
「なんか出ちゃうの…！
オチンチンから変なオシッコでひゃいそうなのっ！」
くちゅくちゅ
ぎゅッ
ぎゅッ


「はみゃっ!?☆」
そして…ユミルの睾丸は
無情にも完全に触手に飲み込まれ
「いやぁあああぁんっ!?」
メスのようなイキ声を上げながら
あっさりと青臭い恥汁を噴射した
ドドド


「おっおぉ…っ！
出る出るっ！変なオシッコ出るっ！」
「害虫に金玉食べられて
オチンチン壊れりゅうううっ！」
それはユミルにとって
最初で最後の射精体験であった
ピュッ
ピュルルッ


「ひっ…ひっぐ…」
初めての射精体験に
暫く動揺していたユミルだったが
彼の心はかろうじて折れてなかった
ぐすん…
（しっかりしろ…
こんな姿エレーナさんに見せられない…）
しかし…飲み込まれた睾丸の場所に
一筋の割れ目が形成されていることに
彼はまだ気づいていなかった
ビン
ビン
プル
プル


そしてユミルは目を前方に向ける
そこには完全に苗床と化している女が
害蟲の糸によって繭のように覆われていた
『こうなったら終わりだ』と
ユミルは決意を新たにする
はぁ
はぁ
肉体改造を施されたであろうその肉体は
繭の外からでもその卑猥さが解るほどで
ビクンビクンと痙攣を繰り返しながら
今まさに出産の時を迎えようとしていた
ジワ…


「ふごっ❤ ふごおおぉおおぉおおぉおおぉおおっ❤」
苗床の女性が獣のような呻き声を上げ
破水と共に繭が破られる
おっ♡
おおっ♡
（うわぁ！）
大きな尻が顕になり
ヒクつく女性器と肛門がユミルの目に飛び込んだ
ブシャアッ


（み…見ちゃった…）
（ずっと前お風呂で見たエレーナさんのと全然違うな…ちょっと…いや…すごく下品だ…）
はぁはぁ
害蟲との度重なる性交により緩みきった性器と肛門は幼いユミルを驚かせた
そんなユミルをよそ目に害蟲は彼女の肛門に肉棒をあてがう
ひく
ひくっ


「やぁん❤そんにゃことひゃれたら赤ひゃん生まれひゃう❤」
女性の声は明らかに艶を帯び呂律が回っていない
そんな彼女の出産を促すように害虫は肛門から子宮を責め立てる
ユミルはその光景を気持ち悪いと思いながらも何故か目が離せないでいた
ひくんっ
ドチュッ
ニュルルル…


「おっひ❤ おぉん❤
アナルぬぽぬぽ気持ひぃ❤」
「害蟲しゃんのぶっといオチンポで
お腹圧迫されてぇ❤
赤ちゃんが早く出たいよ〜って
蠢いてるよぉ❤」
肛門を刺激され
グロテスクな女性器から止め処なく愛液が溢れさせる彼女
その様は理性のかけらも感じさせない
おっ♡
おっ♡
プシュッ
ズーッ
ズーッ
ズーッ

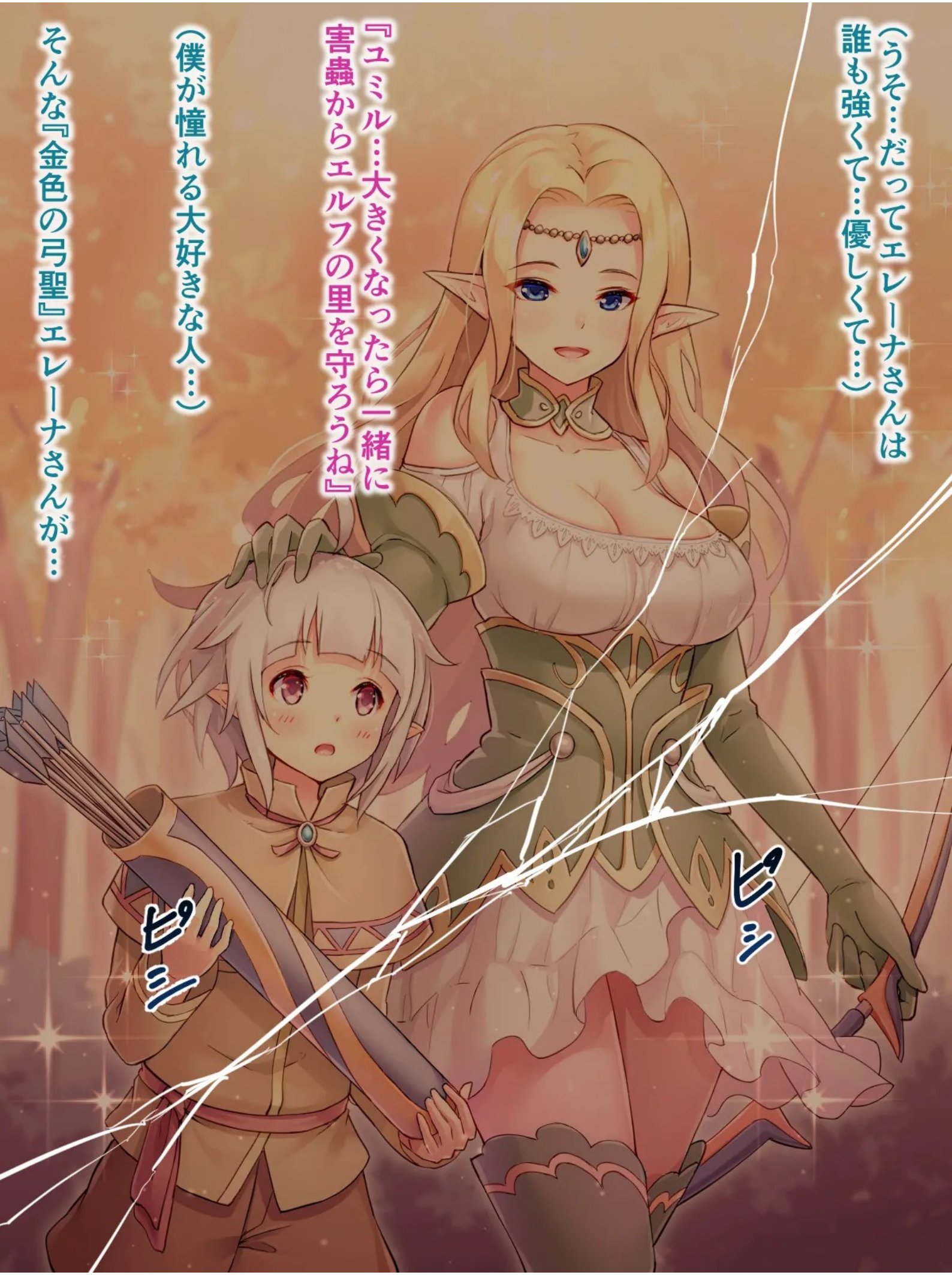

「あっ❤ ああっ❤
らめっ❤ こっちからも出ひゃう❤」
「おっぱいミルク
でひゃうのぉおおおおおおおおおおお❤」
ブビュッ
ブビュルッ
プシュッ
ブーッ
ブーッ
胎動が激しくなる傍で
過剰に勃起した女性の乳首が繭を突き破り
ドロっとした高濃度の母乳を噴射した


（うわ…何あのおっぱい…）
彼女の母乳は害蟲が好む味になるよう
下品な肉体改造が施されており
それによって見た目も
変化してしまっていた
はぁ
はぁ
子供の男性器ほどに
隆起した乳首はビクビクと痙攣し
ドドメ色の大きい乳輪には
ブツブツが浮かび上がっている
ダラァー…
ひく
ひくっ


「ひやぁん❤おっぱい吸っちゃらめぇ❤
それは赤ちゃんのおっぱいミルクらよぉ❤」
「また乳首伸びちゃう❤
エッチな乳首になっちゃうよぉ❤」
そんな言葉とは裏腹に
彼女の乳首はビンビンに膨らんでいく
その表情が快感に緩んでいることは
繭の上からでも明らかであった
カポッ
チュー チュー
プシュッ
ズーッ
ズーッ


「ね…ねぇ害蟲しゃぁん❤
乳首だけじゃなくてお口にもぉちょーらい❤」
「お口にキス❤ キッスしへぇ❤」
「な…なんてことを…
あなたにはエルフ族の誇りは
ないんですか!?」
はぶっ❤
忌むべき害蟲に愛の接吻を求めるその様に
ユミルは怒りを抑えきれずに声をあげた
しかし…顔糸が剥がされたその姿に
ユミルは驚愕する
キュン♡
キュン♡


「エ…エレーナ…さん…？」
それは紛れもなくユミルが憧れ尊敬する女性
エレーナの姿であった
「ユ…!? ユミ…んぶっ❤
ぶむぢゅるるるぅぅぅぅぅぅぅっ❤」
エレーナはユミルの存在に気づき
一瞬恥じらいを見せるも
害蟲のディープキスによって
すぐにただのメスに堕とされる
ビ…
プシュッ
ズーッ
ズーッ


（うそ…だってエレーナさんは誰も強くて…優しくて…）
『ユミル…大きくなったら一緒に害蟲からエルフの里を守ろうね』
（僕が憧れる大好きな人…）
そんな『金色の弓聖』エレーナさんが…
ピシ
ピシ


（こんな品性下劣なメスに成り下がるわけ…）
「ふごふごっ❤
ふごぉおおおおおおおおおおっ❤」
「害蟲しゃんのベロチューで脳とろけりゅう❤」
ぶぢゅるるっ
ぶぢゅっ
「来る❤ 来る来る来るっ❤
赤ちゃんきゅるぅ❤」
「産みましゅ❤
エレーナ蟲の赤ちゃん生みましゅう❤」
ギィ
ギィ
ブーッ
ブーッ


「んほっ❤んほっ❤おほっ❤」
「んほぉおおおおおおおおおん❤❤❤」
グリュンッ


害蟲が肛門に射精すると同時に
エレーナは獣のような声で絶頂し
膣から大量の害蟲の卵を産み落とした
「あ…ああ…」
はーーっ♡
はーーっ♡
ドパ
ドパ
ぶらーん
ユミルにとって絶対的な存在であった
エレーナの痴態は
彼の自我を破壊するのに十分な衝撃であった


「に…逃げなきゃ…」
ユミルの混乱した脳が唯一導き出せる答えは
逃げることだけであった
エレーナが負ける程の害蟲に
見習いハンターが勝てる望みはない
しかし…
「あれ…力が…」
渾身の力で害蟲の糸を断ち切ろうとするも
メス化の影響でユミルの筋力は
格段に落ちてしまっていた


「はぐぅっ！」
害蟲が獲物の逃走を許すわけもなく
ユミルの肛門に野太い触手が突き刺さる
「いやぁあっ！離してっ！
僕は女の子じゃないからっ！
そこじゃ子供作れないからっぁ！」
自分はメスではないことを
必死に訴えるユミル
だがそんなものは害蟲には関係ない
ビクン
ズブブッ


肛門にドクンドクンと
得体の知れない液体が注ぎ込まれる
その液によって周辺の細胞が
死と再生を繰り返し
子宮 卵巣 膣といった
本来男性にない器官が形成されいく
「んっ…はぁ…はぁ… 体が…熱い…」
機能を失った陰茎は女性器と同化し
大きな陰核として生まれ変わった
あっ
あっ
ショロロ…
ドクン
ドクン


「あはっ…あははははっ…
僕のおちんちん…なくなっちゃった…」
気づけばまたユミルは失禁していた
性器が生まれ変わっても
お漏らし癖は治らなかったようである
小さい女体からはオスを誘う
フェロモンも溢れ出し
それが害蟲の肉棒をさらに熱くさせる
ムン
ムン
しょわぁぁ…


「ああ…すごい…❤」
ユミルはその剛直を見てさらに愛液を垂らし初めた
そして…
完全に女体化したユミルは気づいてしまう
『男根（これ）がエレーナ（メス）を狂わせていた
元凶だったのだ』
「ご…ごめんなさい害蟲さん…
謝るから…もう許して…」
ムン
ムン
ジン
ジン
ニニニ
とくとく…♪


「んあっ⁉❤ あっあぁぁあぁぁぁぁん❤」
ユミルの言葉に害蟲は男根で応えた
（え…？今の声…僕の…？）
それに伴い漏れ出たメスの嬌声に
ユミルは耳を疑う
「あっあっ…ちょ…まって…んっ❤」
ゾワッ
ゼクン
ゼクン
ドチュッ


「いや…っこんなので…
害蟲のオチンチンなんかでぇ…んんっ❤」
苦痛だけの性交だけなら
どんなに良かったであろうか
ユミルの膣は処女にも関わらず
トロトロにふやけきり
なんの抵抗もなく
害蟲のに肉棒を包み込んでしまう
あっ♡
あっ♡
ボコッ
ズーッ
ズーッ


「いいのよユミル」
不意にエレーナがユミルに語りかける
「私もね…初めはこんなの間違ってるって思ってた」
あっ♡
あっ♡
「でも…害蟲さんのオチンチンを見た瞬間分かってしまったの」
「私はここで害蟲さんのメスになるべきだって…❤」
「何…言ってるの…？エレーナさん…」
ズーッ
ズーッ


解らないふりをしてエレーナに問いかけるユミル
しかし女体化した生殖器から
ダラダラと垂れ流す本気汁がその答えであった
さらに敏感な乳首とクリトリスも刺激され
自分がただのメスであることを自覚する
「いやぁっ❤はぁんっ❤らめっ❤
先っぽぉっ❤先っぽらめぇ❤」
ゼクン
ゼクン
ズリュ
ニュルル…
ズッチュ
ズッチュ


「お股じゃないわユミル」
「え…？」
「そこはね…オマンコっていうの❤」
「お…オマンコ…？」
はぁ～…
はぁ～…
エレーナは優しい口調で
ユミルに性教育を初めた
「それに…ユミルにはもうオチンチンはないでしょ？
そのビンビンに勃起したお豆さんは…クリトリス❤」
「クリ…トリス…？」
ズリュ
ニュルル…
ズッチュ
ズッチュ


「ね？オマンコ気持ちいいでしょ？❤」
「そ…それはぁ…」
「ほら言って？オマンコ気持ちいい～❤って」
「オ…オマン…コ…気持ち…いい…」
おっ♡
おっ♡
「そうそう上手よ…ほらもっと❤」
「オマンコ気持ちいい～❤」
「オマン…オマンコ…気持ちいい～❤」
「ふっふっ❤その調子よ❤」
ニュルル…
ズッチュ
ズッチュ

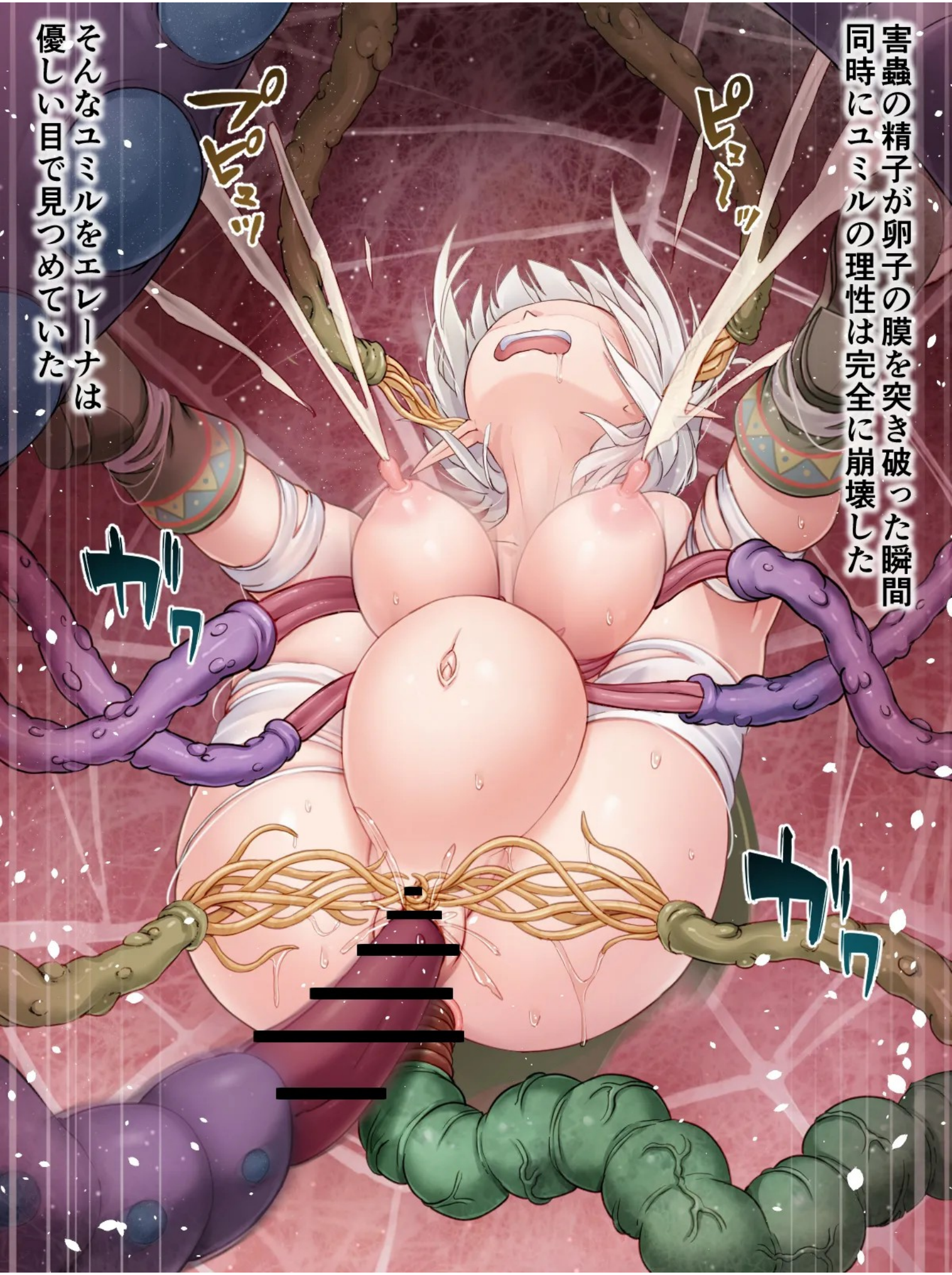

メスマンコ気持ちいぃ～❤
めっ…メスマンコ気持ちいぃ～❤
マゾマンコ気持ちいぃ～❤
マゾマンコ…気持ちいぃ～❤
デカクリ気持ちいぃ～❤
デカクリ…ひぐっ❤
気持ちいぃ～❤
ケツマンコも好き❤
ケ…ケツマンコも…
好きっ❤
チンポ大好き❤
チンポ大しゅきっ❤
蟲チンポだぁい好き❤
蟲チンポだぁいしゅきっ❤
ザーメンだぁい好き❤
ザーメンだぁいしゅきっ❤
くっさいチンポ汁欲しいよぉ❤
くっひゃいチンポ汁…んんっ❤
欲しいよぉ！❤


「おっ❤おおっ❤おっ❤んほぉっ❤
チンポしゅき❤チンポしゅき❤チンポしゅき❤チンポしゅき❤」
いつしかユミルは
自分の言葉で淫語を発しながら
蟲の陰茎を迎い入れていた
あへぇ
はへぇ
その娼婦のように腰を振る様に
男としての尊厳は全く感じられない
「あぁ…すごいわユミル❤」
「害蟲さんのオチンポビクビクして
もう精液きちゃいそうよ❤」
ブルン
ブルン
ズッチュ
ズッチュ


「きてっ❤きてぇっ❤」
「ユミルのメスマンコに害蟲ザーメンどぷどぷしてぇ！❤」
あへぇ
はへぇ
「初めてのオマンコでチンポに即負けしちゃった雑魚エルフのメスマンコにぃ❤」
「容赦なく種付けしてぇえぇえぇえぇ❤❤❤」
ピュッ
ピュルルッ
ズッチュ
ズッチュ


「んひぃぃぃッ❤ 来てるっ❤
こってり害蟲ザーメンきてる❤」
「イッグイッグイグッ❤」
あへぇ
はへぇ
「またイグッ❤」
「オマンコイグ❤ オマンコイグ❤
オマンコイグ❤オマンコイグッ❤」
ブルン
ブルン
ズッチュ
ズッチュ


「ユミルのメスマンコ
イッグううううううううううう❤」
ピュ～ッ!!
プピッ!!
ボコッ
ドドド


害蟲の精子が卵子の膜を突き破った瞬間
同時にユミルの理性は完全に崩壊した
そんなユミルをエレーナは
優しい目で見つめていた
ピュ～ッ
プピュッ
ガク
ガク


「エレーナ…しゃん…
ごめんらはい…私…害蟲に負けひゃいまひた…」
「いいのよユミル…」
はぁ～…
はぁ～…
ピュッ
「あなたはいつも
自分は半人前だって嘆いてたけど…」
「今のあなた…とっても立派なメスになってるわよ❤」
しょわぁぁ…
ゴポォ


「あ…あはは…やったぁ…❤
私も一人前になれたんだぁ❤」
（嬉しい…
憧れのエレーナさんが褒めてくれた…）
はぁ～…
はぁ～…
「はは…あはははは…」
彼女が元気な害蟲の赤ちゃんを出産したのは
数日後の話だ
ピュッ
しょわぁぁ…
ゴポォ































































































